

On the Linguistic Distinction between Histories

Takuo AOYAMA

Abstract

We often represent the possibilities of history by a tree diagram. However, what a branch in the diagram means is not clear. In this paper, I do not regard each branch as an individual possible history but as a set of possible histories, which is distinct linguistically. This view rejects the common claim (like Bergson's) that a tree diagram is not a suitable representation of possible histories because the future is not determined yet and cannot be represented as a spatial line. We cannot draw a complete tree diagram which contains individual possible histories, but that does not contradict the metaphysical fact that any possible history has the completeness of a world.

歴史の言語的弁別について

青山 拓 央

1 時間分岐

歴史の可能性はしばしば、樹形図として表現される。過去から未来に向かって枝が分岐していく樹形図として(図1)。樹形図上のどの時点から見ても過去の歴史は一通りだが、未来の歴史はいくつもある。諸偶然や人間の

決断によつて、このたぐさんの可能性の枝から現実の枝が選ばれていくように見える。たとえば私はいまから——仮に体調が悪いとして——病院に行くことも行かないこともできるだろう。もしも私が病院に行つたなら、「病院に行く」歴史と「病院に行かない」歴史のうち、「病院に行く」歴史が選ばれたことになる。

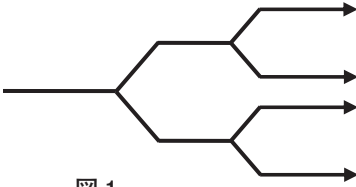


図1

この種の時間の描像にはさまざまな批判が寄せられてきたが、本論ではそうした批判における、ある一般的誤解を解くことにしたい。とくに検討したいのは、図1のような歴史の図示が、未だ存在しないものとしての未来の非決定性を取り逃がすという批判である。

こうした批判は、単線による過去・未来の図示に対してよくなされるものだが、しかし、図1のような樹形図に対して、同じ批判は当てはまらない。なぜなら、これは可能性の樹形図だからだ。未来の非決定性は——仮にその非決定性を認めるとしても——、多様な可能性のどれが実現するか分からない、というかたちで理解すべきものであり、諸可能性の一つひとつについて、その内容が定まっていることを否定するものではない。

ここでは、可能的歴史の内容が形而上学的に思考されている。つまり「病院に行く」「病院に行かない」のような荒い言語的弁別は、それぞれの可能的歴史への認識

論的興味からのラベリングにすぎない。個々の歴史はこれらのラベルには記載されていない細部——たとえば何歩で病院に着いたかなど——をもっており、だからこそ完全性をもった個々の世界である。完全性をもっているとは、つまり、任意の命題に関してその真偽が定まっているということだ（可能世界意味論において、どの可能世界にも完全性が認められるのと同様）。

それゆえ、図1のような樹形図における二又の歴史は、二種類の歴史の集合を略記したものと考えてよい。病院に行く歴史と行かない歴史はそれぞれ無数のバリエーションをもつが——百歩で病院に着く歴史と百一歩で病院に着く歴史のような——、そうした無数の可能的歴史が、病院に行くか行かないかの二分のもとで略記されているわけだ。

非空間的自由の経験は空間化された描像では捉えられない、というベルクソン風の主張を仮に認めたととしても、そのことから、図1のような空間化自体を退けることはできない。可能的な歴史を概念的・言語的に空間化できること（たとえば病院に行く可能性と行かない可能性の分岐を描くこと）は、現実での自由の経験のすべて——とりわけその動的な質感——を空間化できないことと矛盾しないし、また、ベルクソンの語る「自由」は人

格（過去の履歴）の表現・投企としての自由であって、未来の非決定性と直接関係はしない（Bergson 1889; 第三章）。というのも、そこで重要なのは「芸術家と芸術作品」の間に見られるような人格と行為との一貫性であり、それは決定論的世界においても十分に成立可能だからだ。

2 言語的弁別

未来の諸可能性の分岐を、歴史集合の分岐ではなく個別の歴史の分岐として描くことは、原理的には可能である。歴史のあらゆる細部に関して完全な言語的弁別を行ない、それに応じた樹形図を描くならば。あらゆる分岐が何らかの命題の真偽によって弁別できるなら、この樹形図は二又の分岐点（真か偽）のみで構成されるだろう。

もっとも原始的な命題とは、こうした二又を構成する命題だと考えてみても面白い。すなわち、世界を構成するもっとも原始的な要素は、未来の諸可能性の樹形図を個別的な未来についてのものとしたとき、その樹形図上の二又の分岐の真偽に対応する事象である、というように（同じことをこう表現してもよい。世界の原始的要素とは、真偽それぞれの実現確率が二分の一の事象である、

と)。

しかしこのような樹形図の完全化(枝の個別化)は、実践上はまったく不可能であるし、未来の諸可能性の思考において、われわれは事実そんなことはしていない。諸可能性の弁別はあくまでも荒く、弁別されるのは、ある集合と他の集合である。私これから病院に行くことは、「病院に行く」諸可能的未来のうちのどれか一つへと進むことであり、これと見定めた個別の未来へと進むことではない。

これから私が病院に行くとして、「病院に行く」歴史には無数の諸可能性がある。百歩で病院に着く歴史と百歩で着く歴史は別の歴史であり、診察時に——私の知らないところで——シチリアの火山が噴火している歴史としていない歴史とは別の歴史である。私が自宅に戻った瞬間、飼ひ猫の毛がちょうど何本であるかによつても、歴史は無数の諸可能性をもつ。

「この歴史」のような直示的表現に依存せず、諸可能性としての歴史からただ一つの歴史を指示するには、諸可能性のあらゆる言語的弁別に対して特定の記述を与えねばならない。つまり、さきほどの例で言うなら、私は何歩で病院に着いたか、診察時に火山は噴火したか、帰宅時に猫の毛は何本であったか、こうした問いに延々と

答えねばならない。これは不可能な課題であり、言語的弁別をどこまで繰り返しても、ただ一つの歴史に行きあたることはない(もちろん原理的に言えば、歴史の構成要素が n 個あるとき、どの歴史も n 個の記述によつて指示しうる。 n がどれほど膨大であつても、それは有限であらう。しかし、そのような指示の実行は明らかに人間の能力を超えている)。

「病院に行く歴史」のような指示は、私これから病院に行く可能的歴史の集合を指す、と考えることができる。私が本当に病院に行くなら、そのとき現実となる単一の歴史は、この集合内の諸歴史のどれか一つと同じものだ。何歩で病院に着くか等、細部の記述を重ねていけば、指示される集合はどんどん小さくなるが、先述の通り、この作業によつて単一の歴史に行き着くことはない。ところでこの事実を、未来の非存在性や非決定性とそのまま結びつけることはできない。過去は存在し決定されてい、と仮定しても、非直示的な記述によつてそれを特定できないことは変わらない。

たとえばシドニー・オリンピックで高橋尚子がゴールテープを切った瞬間、彼女の髪は n 本だったとしよう。ではあなたはその現実の過去を、彼女の髪が $n-1$ 本だった可能的過去や $n+1$ 本だった可能的過去のなかか

ら特定できるだろうか。「この歴史における過去」のよ
うな直示的表現を禁じられたとき、無数の諸可能性とし
ての過去から現実の過去を特定することはできない。歴
史の内容の整合性を見ても、やはりその特定はできな
い（どの可能世界も無矛盾であり、それぞれの整合性を
もつ）。未来の場合と同様、記述の集積でなしうるのは、
過去の諸可能性を絞り込むところまでである。

過去の諸可能性が無数にあるとき、現実の過去を指示
するただ一つの方法は、直示的表現を用いることだろう。
今、私のいる「この歴史」こそが現実の歴史であるとい
う事実によって、「この歴史」における過去は、現実の
過去となる。時制を分割して述べ直すなら、「この現在」
こそが現実の現在であるがゆえに、それと地続き——時
続き——の過去こそが、現実の過去なのである（厳密に
そう言えるためには、それが可能的に地続きなだけでな
く、現実的に地続きでなければならないが）。

次のような反論には概念的混乱が含まれている。「過
去は決定済みであるから、過去についての諸可能性など
ない」。もしこの考えが正しいなら、過去についての反
事実的な仮想自体が成り立たないだろう。諸可能性の一
つが現実になることで、他の諸可能性が消し去られるこ
とはない。諸可能性の選択がすでに終わったことと、諸

可能性そのものの消失は異なる（仮にそれが同じだとす
れば、後述のような時制的問題が生じる）。

過去だけでなく未来や現在についても諸可能性の存在
を認めないなら、もちろん話は明快だ。その場合、時制
とはいっさい無関係に、歴史の可能性はただ一つ（現実
の歴史）しかない。ここではもはや「現実」「この」といっ
た修飾は余計であり、たんに「歴史」といえば、それは
唯一の歴史を指す。これは決定論（とりわけ宿命論的な）
の構図であり、歴史の言語的弁別は最初から問題となら
ない。

しかし、過去の諸可能性を拒否しつつ未来の諸可能性
を認めるなら、そこにはたいへんな困難がある。歴史の
可能性の描像は、どの時点が今であるかによって時制的
に刻々と変化しなければならず——今より以後（未来）
には可能性があるが今より以前（過去）には可能性自体
がない——、この時制的な非対称性を擁護することは容
易ではない。

たとえばその非対称性を、過去は存在するが未来は存
在しない、といった別の前提によって説明することも難
しい。ある仕方で存在するものについて、まさにそのよ
うに存在するという理由から他の可能的なあり方が否定
されるなら、可能性とは存在しない事物についてのみ認

められるものになつてしまふ。これは明らかに通常の可能性理解を逸脱しているし、たんに逸脱的だけでなく、その有意味性も疑わしい（たとえば、存在しないものについての諸可能性はいかなる主語を用いて記述されるのか）。

さらにここには、マクタガートからダメットを経て今日まで論じられる、時制と記述との不調和がある。諸可能性の全体像が時制的に変化するなら、諸可能性の樹形図は、つねに不完全なものとして変化し続けることになる。ダメットが実在の記述に関して述べた問題は、諸可能性の記述に関しても発生することになり、しかも、そこで進行する時制的変化を言語によって十全に記述することはできない（この記述不可能性については、青山二〇〇四で詳述した）。

3 実現可能性

未来についてであれ過去についてであれ、非直示的な記述のみでは、諸可能性としての歴史から現実の歴史を指示することはできない。言語的弁別と独立の現象的弁別というものが仮にあつたとしても、やはり同様の議論は当てはまる。ある瞬間の現象的光景について、その細

部をすべて把握し、可能的な諸現象的光景からただ一つのそれを特定することはできない。

それゆえ、図1のような図示への批判には、次のように応じることになる。あの樹形図は可能性の樹形図であり、その可能性の弁別が言語的（あるいは現象的）かつ実践的になされているならば、どの枝も諸可能的歴史の集合の略記と見なせる。だから、未来の細部について完全な記述を与えられない——個別の未来を個別の枝によつては表現できない——ことは、樹形図を描くことと矛盾しない。

個別のかつ現実的な未来が「この現在」と地続きの未来であり、個別のかつ現実的な過去が「この現在」と地続きの過去であるなら、それらの未来・過去への直示は、「この現在」への直示に依存する。しかし現在への直示についても、未来や過去と同様の指摘ができることは明らかだ。樹形図上の枝は可能的集合であるから、個別的時間点としての「この現在」は、樹形図上のどの点とも同一ではない（どの点も可能的瞬間の集合なので）。だが、それでも「この現在」は、いずれかの点の内部にはある。それがどこにあるのかを知るのに、われわれは何をするだろうか。通常の空間的な地図を見て、自分がどこにいるのかを知るときのように、われわれは自分の周囲を

見るだろう。つまり、「この現在」がどのようなものかを見ることで——そこには現在においてなされた想起や予期も含まれる——、樹形図のどこにいるのかを探るだろう。

とはいえ、このような作業を続けても個別的な点にいたることはなく、指示集合が絞り込まれるに留まる。現在の世界へのわれわれの知識はいつでも不完全であり、その不完全さを自覚するだけの諸可能性について、つねに思考できるからだ。現在の世界について、それがどのようなものであり、か・の・知・識は、それがどんなものであるかの知識よりもつねに大きく、後者は前者の一可能性として把握される。

それゆえ、「この現在」の直示とは、樹形図上の一点をもってそれを捉えることではない。樹形図上のどこかは不明でも、定まった位置をもつものとしてそれを指すこと、そしてむしろ、その一点を含むものとして後から——他の可能性との対比のもとで——歴史集合としての枝が思考されること、それが「この現在」の直示である。

これは通常の意味での直示（指で対象を指すような）ではなく、純粹指標子（「今」「ここ」「私」）に類する指示であるが、しかし、通常の直示もまた本質的には同じ作業を伴うと言える。つまり、目の前の何らかの対象を

指すことは、その対象の諸性質だけでなく、まさにその対象が属するただ一つの個別的現在（現実）を指すことでもあるからだ。そうでないなら、その対象と実践的に識別できないほど類似した、諸可能的対象のうち、どれがその対象なのかはけっして定まらない（「私」が指したものがそれなのだ、と言えるのは、その「私」が「この現在の私」としてすでに把握されているときだけである）。

クリプキ自身の意図とは独立に、クリプキの言う「命名儀式」（Kripke 1980, pp. 96-7, 邦訳一一五頁）はこの意味での対象の直示を求める、と論じることが可能だろう。「昨日隣家に生まれた猫をタマと名付ける」のような非直示的な命名でさえも、この命名作業はどこかで、タマそのものへの直示を巻き込まねばならず——たとえば、その猫が生まれたことを教えてくれた隣人は、猫そのものを直示しているだろう——、そこには対象の面識（直接的な知覚）がある。

命名儀式の瞬間、まさにその瞬間に存在するものとして、記述の束に還元不可能なトークンの対象が確保される。命名者が目の前の「それ」を名付けることにより、現実世界における「それ」は実現可能

性の時間分岐点となる。『名指しと必然性』には繰り返し「当の (the)」という表現が出てくるが——「当の男」「当の物」のような——、「当の」とは「それ」であることだ。性質非選元的なこの当該性は、指示の因果説において、命名時点での「それ」を捕捉することで意味を得ている。それゆえ、一つの固有名を使うことは、一つの時間的な様相分岐図を指すことだ。当該の「それ」は世界の一部として、可能性の枝を進んでいく。これは三次元的な全体としての「それ」の時間的変化であるとともに、二次元的な全体としての世界の時間的変化でもある。(青山二〇一一、五一頁)

引用文中における「それ」は、現在のわれわれの文脈において、「この現在」の一部と見てさしつかえない。すでに述べた理由から、それを記述の集積によって樹形図上に個別に定位することはできない。にもかかわらず、それは形而上学的に定位されており、諸可能性の樹形図はむしろ、その定位を核に構成されていく。すなわち、「この現在」を含む何らかの枝がまず存在し、その枝のもつ諸特徴が他の可能性と弁別されること——その弁別が繰り返されること——、樹形図は時間的に展開してい

く。一般に、面識された対象には認識を超えた無数の細部があるとされるが、この形而上学的な信頼は、「この現在」の定位への信頼と同じ根をもっている。

「この現在」が樹形図上の一点に形而上学的に定位されるとき、その点から他の点への時間的連続性をもって、「この歴史」の全体が思考される。分岐が未来方向にしかないなら、「この現在」の定位によって同時に、「この歴史」の過去も一通りに定まる。しばしば「過去は決定されており諸可能性をもたない」と誤った仕方ですべてられているのは、過去のこの定位の事実である。

諸可能性が未来向きにのみ分岐し、それが認識上の錯覚でないなら、過去・現在を定位するようにして未来を定位することはできない。とはいえ、開かれたその未来は、定位された過去・現在を幹とする一本の樹として思考される。

この樹はそれ自体が樹形図であるが、過去・現在の定位以前に与えられていた無限定な樹形図に対して、格段に小さい。それは不特定の歴史にとつての諸可能性の樹ではなく、「この歴史」にとつての諸可能性の樹であり、「この現在」の論理的可能性ではなく、「この現在」と地続きな実現可能性を表している。すなわち、ここでは「ありうる」に「なりうる」が先立つ。未来の諸可能性の樹

形図から、まず読み取られるべきはこの関係である。

文献

- 青山拓央二〇〇四、「時制的変化は定義可能か——マク
— タガートの洞察と失敗——」、『科学哲学』、二七卷二号、
五九—七〇頁、日本科学哲学会。
- 青山拓央二〇一一、「指示の因果説と起源の本質説」、『時
間学研究』、四卷、四九—五六頁、日本時間学会。
- Bergson, H. 1889, *Essai sur les données immédiates de la
science*. Paris : F. Alcan 〈邦訳〉『意識に直接与え
られたものについての試論』、アンリ・ベルクソン著、
合田正人十平井靖史訳、ちくま学芸文庫、二〇〇二。
- Kripke, S. A. 1980 (1972), *Naming and Necessity*, Basil
Blackwell and Harvard University Press. 〈邦訳〉『名指
しと必然性』、S・A・クリプキ著、八木沢敬十野
家啓一訳、産業図書、一九八五。